「出題の意図」

選抜区分	２０２５年度　（選抜区分：学校推薦型選抜） 文学部・人間関係学科　（科目名：小論文）
出題の意図 **（評価のポイント）**	Anders Hansen 著『The Attention Fix』から一部を抜粋して出題した。問１は英語の読解力、問２はそれに加え、要約力を確かめる問題となっている。問 3 は思考力、表現力をあわせた小論文の作成能力を把握することをねらいとしている。 問 1 　課題文中の該当箇所を特定することはできていたが、日本語に訳すことが十分できていない解答も多かった。 【解答例】 　知能の容量を解放して、それを何か別のことに使えるようになること。例えば、GPS が自分の代わりに目的地を見つけてくれれば、集中してポッドキャストを聴いたり、仕事のことを考えたりする時間ができる。(96 文字) 問 2 　英文をよく理解できておらず、過去の技術革新の説明とデジタル機器の説明が混同している回答が散見された。 【解答例】 　過去にも「情報の洪水に溺れ、自分で考えることができなくなる」「鉄道酔いをする」など技術革新が起こるたびに懸念は指摘されており、今回のデジタル機器に対する懸念もそれらと同様のもののように思えるかもしれない。しかし、デジタル機器はどこにでも持ち歩き、基本的に昼夜問わず一日中使っている点が過去の技術革新とは異なる点であるため、今回の懸念を深刻に受け止めた方がよい。(180 文字) 問 3 　著者は本文中でスマホなどのデジタル機器に多くのことを任せることによって知能が次第に失われるというデメリットを主張している。しかし、本文中には人間関係に関するデメリットはあがっていないため、受験生には自身でこのデメリットを考えることが求められる。また、本文中ではデメリットが強調されているため、デジタル機器の使用頻度を下げるというデメリットの解決方法のみを考えてしまいがちであるが、受験生には、デメリットを踏まえた上で、デジタル機器を上手に活用する方法を考える思考力と論理的説明力が求められる。 　答案は、全体的には似たような内容の回答が多かったが、そのなかで、問いの意図に応じてデメリットと活用の方向性の両面を論理的に的確に答えられているかが鍵となった。より詳しく講評すると、人間関係におい

	て一般的にスマートフォンの弊害とされている要素をやみくもに前提としてしまい、それを未然に防ぐ心がけを述べるにとどまるものが多く、より根本的な課題の吟味と妥当な「方法」の提案があったものは加点となった。方法を「上手に活用する」点も独創性を測ることのできる問いであったが、現在すでにある用例と用法の単なる列挙にとどまる回答が多い中で、課題文で示されたデメリットを超えるような人間関係上のメリットを生むデジタル機器の積極的な使用を目指した活用法の考察を行ったものは評価された。